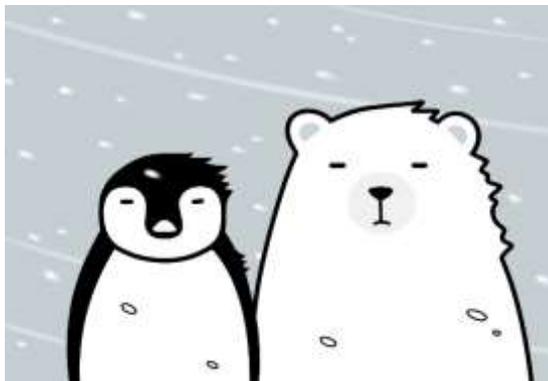


# Principal Correspondence

## リリーベールの自立の心はここからきています

ウクライナ人がロシアに抵抗し、国を断固として守る姿を見て、最近の日本の諸相と見比べると心配になるこの頃です(子どもを戦争に巻き込むことは絶対に反対です。子どもは逃げるべき！それを踏まえたうえで・・・)。

日本人は欲求のままにやせ我慢がなくなってきたと思います(もちろん私も反省を含めて)。特にバブル(30年前のことですが)。作家の司馬遼太郎さんが「このバブルの風潮は人間をダメにし、日本人を悪くし、何十年もその後遺症で悩むことだろう」と看破しておられましたがその通りになりました。あの時、元来、額に汗して働くことを尊ばず、投機や土地ころがしで国民みんなが幸せになれるはずがなかったのですが、誰も浮かれて耳を貸さなかったのです。



「やせ我慢」とは「自立」の精神であります。英国で生まれたスポーツはゴルフもラグビーもサッカーも雨でも場合によっては嵐でもやりますが、これなどは考えようによっては馬鹿馬鹿しい「やせ我慢」の極致です。しかしこのたくましいジョンブル精神が生き活きと生きていたころ、大英帝国(ヴィクトリア女王の時代)は世界の覇者でした。司馬遼太郎さんによると日本も「武士は喰わ

ねど高楊枝」の武士道精神が生きていた明治のころは、世界の発展途上国では恐ろしく賄賂が少なく、教育に投資をし、実力主義の生き活きとした時代だったといえます(司馬史観という見方もありますが私は賛成です)。それ故、日本は有色人種でほとんど唯一の先進国になりました。大部分の発展途上国が戦後独立して75年も過ぎているのに未だに先進国になれないのは指導者の賄賂と、教育に金を使わないことと、既得権益やコネの社会で腐敗しているからだと言います。

自立は「自己犠牲」も伴います。およそ人は経済原理で動く動物ですが(つまり損得そろばん勘定で基本的に動いている)、その中でも、社会や国家のため、あるいは広く人類のために志をもって動く人がおります。というか、誰もが「社会のために」という志を、心の何パーセントか(人によっては何十パーセントも)もっているといった方が適当かもしれません。



これからはその「自己犠牲」の精神をもつ人がどれだけいるかで、国力がはかられる時代になるでしょう。ただし、その自己犠牲、奉仕の精神は、誰かに強要されるものではなく、個人の自由意思で決めるものです。そこが戦前の自己犠牲とは異なるべきであります。人々の心から毅然とした誇りや、やせ我慢が無くなって、万事、安易な方へ、安易な方へと流れるとき、一つの文明は内部から崩壊していくのは歴史の語るところです。

# Principal Correspondence

## 一流を目指すこと



野球選手の中で誰でも知っているイチロー選手は、「僕は天才ではありません。なぜかという、自分がどうしてヒットを打てるのかを説明できるからです。あとから説明できるというのは天才ではない証拠」と言っています(でもその努力は天才だと思いますが…?)。

つまり論理的に何故打てるのか、打てなかったのか説明できるわけです。これをアカウンタビリティと言い、同じフィジカルの人が同じフォームでやれば再現できるというものです。

一方、いわゆる天才は「言語化」できず、「再現性」が無い人を言い、昔のジャイアンツの長島選手のように「ぎゅっと腰を入れてピュッと打つ」と言うような再現不可能な、説明できない人を言います(別にネガティブに言っているのではありません。)

しかし、教育とは決して一足飛びに天才をつくることを目指すことではありません。未来にそれぞれ、いろいろな分野で活躍し、一流の人(超一流?)をつくる営みです。

しっかりとした裏づけとサイエンスの下にアカウンタビリティのある事をこつこつ積み重ねて、勉強したり、トレーニングしたり、レッスンしていくことを言います。ただし、そこには「憧れ」とか「夢」とか科学的に説明できない「情熱」や「モチベーション」が無ければ続きません。

現在の少年少女期には多くの「夢」が持てるような実体験や感動が必要です。それも多くの仲間や友達の中で(イチロー選手もそうでしたが)競い合い、励ましあい、刺激を受け、時には悔しい思いをしながら育んでいくことが大事です。決して一人だけでは「夢」や「情熱」も続きません。育脳学童は学年を超えてそういう場を提供したいと思います。

